

五輪開会式、「90 年代的なるもの」と森山未来の意味

有料会員記事

聞き手・小峰健二 2021 年 7 月 26 日 17 時 00 分



東京五輪の開会式で演じる森山未来さん=2021 年 7 月 23

日、国立競技場、諫山卓弥撮影



コロナ下で 23 日に開幕した東京五輪。演出を担うクリエイターが直前に辞任、解任となり、無観客の中で行われた異例の開会式をどう見たか。音楽、映画、演劇、文学と幅広く批評する佐々木敦さんに聞いた。

• 入場行進にドラクエ、世界に魅力伝わった？ 五輪開会式

——開会式をご覧になって、率直な感想を聞かせてください。

開会式のクリエイターのラインアップが発表された時に、1990 年代から 2000 年代初頭ぐらいに活躍した人の名前が多く見られたので、なんらかの意味で「90 年代感」のある演出になるのではないかと予想しました。結局は辞めた人になるんですが、演出全体の調整を担う小林賢太郎さんしかり、音楽を担当する小山田圭吾さんしかり。それに音楽監督の田中知之さんもそうですよね。

その頃にノスタルジーがある、現在 40 代ぐらいの人たちが選定になんらかの形でコミットしている、あるいは一番最初に声をかけられた人たちの中にいるということなのかなと思ったんです。その意味で、「90 年代的なるもの」がどんな風に露出してくるのかということが気になっていた。でも、違う意味での「90 年代的なるもの」への注目がなされてしまい、特に小山田さんの問題では、悪(あ)しき「90 年代性」が取り沙汰されることにもなった。その結果、小山田さんの問題も含めた複数のトラブルを経て

無理やりに敢行された開会式がどのようなものであるかという視点でしか見られなかったということがまず前提としてあります。虚心で見られない、と言いますか。

- **開会式担当解任が示す日本の大衆娯楽の「ガラパゴス化」**

最も引がかかったのは、総合的な演出を担う人を直前に解任したのに開会式をやったこと。しかも、その説明は小林さんが「具体的に1人で演出を手掛けている個別の部分は無かった」というものでした。解任が式前日の出来事だったので、「ここは小林さんっぽさが残っているな」、あるいは「小山田さんの代わりの部分はここなのかな」みたいな見方をついてしまう。それは多くの方がそうだったと思う。そういうところばかり気になってしまうのが、あらためて異常なことだなと思う気持ちもありました。

——全体の演出に関してはどうでしょうか。

安倍政権時代からの「復興五輪」という理念があり、コロナウイルスの感染拡大があると、問題が複雑化してしまったことが開会式の演出全体に影響したように感じます。復興に向けて歩んできた東北であるとか、コロナ下での医療に従事する人たちとか、多様性という理念であるとか、押さえておくべきチェックポイントがたくさんあったということだと思う。それらが付け焼き刃のように、「ここもちゃんと押さえている」「こっちの問題もちゃんと入れている」と詰め込んでいった感があります。直前まで、あまりに「炎上」しすぎたので、開会式ではさらなる炎上は避けたいという意識が働いたのか。働く時間もなかったかもしれないけれど、配慮すべき課題みたいなものを、「これもちゃんとやっていますよ」といった、足し算で散漫にやっちゃっている感じがすごくしました。

式の構成も、とにかくシーンが矢継ぎ早に変わっていく。テレビのチャンネルを変えるみたいに。もうちょっと見たいと思った場面も、すぐに次のシーンに移ってしまう。その詰め込んだ感じも、本来はどのような予定で当初は進んでいて、どういう形を変更を余儀なくされて、実際にどういう本番になったかというのがわからないので、なんとも言えないのですが。見た印象としては、炎上しないように、あるいは、あわよくばちょっと褒めてもらえるように、色んなチェックポイントを潰していったという流れの3時間半超ということでしょうか。

——式典の責任者も「多様性を認め合う『ダイバーシティ&インクルージョン』に重点を置いた」と言っています。

僕はアウトサイダーなので好き勝手な言い方になっちゃいますが、放送したNHKの実況の方々も「多様性」と「調和」とやたらと言っていたんですね。

ダイバーシティというキーワードは、もちろん世界的にも大きなテーマであり、実現すべき目標であり理念です。日本でもそのような流れに乗らなくてはという感じが、2010年代後半ぐらいから、政治だけではなく、社会や文化の次元でも唱えられるようになってきた。多様性は間違いなく正しいのだけれども、口に出せばいいというわけではない。実際に「多様性」を実現していくためには、ものすごく繊細な配慮や精緻(せいち)な戦略が必要なはず。でも、それを「はい、これが多様性です」みたいな形

で安直に示されているように見えてしまった。「多様性」「多様性」と言えば言うほど本物の多様性から遠ざかっていくのではないか、という気持ちが強いです。異質だと思われるものをただ同時に出すことによって、「これとこれは違うでしょ？ でもこの二つは同じ場で共存している。これが多様性への第一歩です」という風に見えてしまった演出は、やっぱり浅はかだと思いました。

それがクリアに出たのが市川海老蔵さんと、上原ひろみさんの共演場面。歌舞伎座で待っていたという設定の海老蔵さんが登場し、その横で海外でも人気のあるジャズピアニストの上原さんが共演する。両者の「突き合わせ」は、あまりにも単純で、暴力的とさえ感じました。お互いの良さも完全に消していると思いますし、あれを見て聴いて「異質のものが同時にあって素晴らしいな」と思う人ってほとんどいないんじゃないでしょうか。演出側の意図や狙いがあまりにも見え見えで、どうにも単純に感じられる場面が非常に多かったと思うんですね。

——ドローンやプロジェクションマッピングのような最先端の技術と、祭りや歌舞伎のような伝統文化を絡めていました。

今述べた場面を含み全体的に思ったのは、これは今回の開会式だけでなくこの国の文化全体の問題だと思うんですが、日本の文化って近代以前と今しかないんだなと思ってしまった。一方に祭りや古典芸能など「古き良き伝統」を配置し、もう一方にアニメやゲームといった「文化商品」を配置する。その間に位置しているようなものがない。もしかしたら「90年代的なるもの」がそこを担うものだったのかもしれない。つまり、90年代的人たちが今回の五輪の中でそれなりのパートを任せられるということ自体は、それほど悪いことではなかったかもしれないんですね。でも、それは実現できなかった。田中知之さんが手掛けたのであろう最初のオープニングの場面は、90年代っぽい感じだったのかなと思いますけれど。海外向けの「クールジャパン」は今なお古典芸能とアニメ、ゲームということになるのでしょうから、それはそれで良かったのかもしれないですが(笑)。

——古典芸能とアニメ、ゲームの間にある何かというのは、想定するとすれば、今回頓挫してしまった「90年代的なるもの」だったということでしょうか。

日本のポピュラーミュージックの歴史は、外国産の音楽、いわゆる洋楽をいかに日本の文化の土壌に植え替えるかという試みの系譜だったと思います。インターネットがない頃は、全部音源でしか聴けないから「海の向こうで、ボブ・ディランが出てきたよ」「ビートルズが出てきたよ」っていうので、それをレコードで聴いて「俺たちもこれをやりたい」というようなことが続いてきた。そして、90年代に入ると輸入文化がマックスのところまで来て、ほぼオンタイムで海外の最新の流行を知ることができるようになった。でもそのままではやれないから、日本的にトランスフォーメーションせざるを得ないということが、90年代の音楽文化の核心だったわけです。(小山田さんが所属した)フリッパーズ・ギターなどの「渋谷系」に面白みがあったとするとそこだったと思うんですね。ある意味では真似(まね)でしかないんだけど、海外で流行している音楽をいち早く取り入れて、でも日本語で歌わなければならないことなどもあって奇妙なカタチになる。日本的な変異みたいなものが起きてしまうことが逆に魅力や個性になっていた。ヨネリヤス(小山田さん)にしても、ファンタスティック・プラスチック・マシーン(田中さん)にしても、その周りのアーティストもそういう部分があったわけです。それが日本の音楽文化の、いわば独自性だった。しかし一連の騒動によって、そこは見えなくなってしまった。

もう一つ、人材の乏しさも露呈してしまった。たくさん断られたのかもしれないけど、そうなると、どうしても古典かアニメ、ゲームになる。誰もが知っている最大公約数に逃げるしかなかったと思うんですね。

5年前のリオデジャネイロ五輪では、ブラジルのカエターノ・ヴェローゾとジルベルト・ジルといったポピュラー音楽の世界で最高水準にあるような大スターが出ていた。彼らに匹敵するようなアーティストを開会式で出せなかったのも大きい。だから、ドメスティックな観点でしか考えられていない、カッコ付きの「国際性」みたいな感じがしました。音楽だけではないですが、世界に通用するスターの不在があらわになったということでしょうか。

——音楽で言えば、ジョン・レノンの「イマジン」が使われました。

「イマジン」は、まあ、テッパンですよ（笑）。最初から決まっていたのかもしれないけれど、困った時には「イマジン」みたいな感じて、やっぱりある。世界的にもそうだけれども日本の場合、オノ・ヨーコさんの存在があるから、余計にマッチするみたいなところがありますし。

今、日本の70年代から80、90年代のポピュラーミュージックがネット上で海外の音楽リスナーに発見されてブームになっている。海外のレーベルから復刻されたりするケースが増えてもいます。そうした「知られざる日本のすごい音楽」、あるいは米津玄師とかYOASOBIとか「ニッポンの最新のポップミュージックは、これ！」とか八かを出す。そういう大胆なプレゼンの機会にもならなかった。

元来、攻めの姿勢を取りづらいイベントではありますが、さらに守りに入らなければならない事態がいくつも起きた。そこでたどり着いたのが「イマジン」だったのではないのでしょうか。「イマジン」にはケチはつけられないし、つけた方が炎上するじゃないですか（笑）。でも、そこは一矢報いてほしかったというのはありますよね。音楽だけじゃなく。

演出も、テレビクルー役で芸人が出てきたり、競技会場の照明で遊ぶ劇団ひとりさんが登場したりと、小芝居的なコントみたいな場面が多く、いかにも日本のテレビ的だなと思いました。無観客だから放送や配信が基本になるのは分かるのだけれども、ド派手にはできないし、押しもできず、引くこともできず、こぢんまりとした演出でなんとか乗り切るしかない。やぶれかぶれのやり方になっていけば、「やってやった」という感じがあつたらうけど、そうはならない。もう少し知恵が結集していれば、面白い式典が出来たんじゃないかなと。正直、出来の悪いテレビバラエティーを見せられているような印象が強かったです。次々に場面も変わっていく足し算じゃなく、掛け算の演出になればよかったのでしょうか。

——他に気になった場面はありますか。

ここまで、心に引っかかってこなかったと言っはいますけれど、一番いいと思ったのは森山未来さんでした。森山さんは、望まぬ死を選ばされた人々への鎮魂のダンスを披露しました。森山さんは6月に、岡田利規さんが作・演出した「未練の幽霊と怪物—『挫波』『敦賀』—」という舞台に出演していて、そこでザハ・ハデイドの霊として踊っていた。ザハは、世界的な建築家で、コンペで勝ち取った新しい国立競技場のプランを白紙にされ、その後亡くなっています。そんなザハの霊として踊った人が、1カ

月後に開会式で鎮魂の舞をした、どうしてあんなことが実現したのか分からないけれど、すごいなと思いましたね。森山さんは出演した後、SNSで岡田さんに対する敬意を記していたそうです。

そして、この件ですごく興味深いのは、「未練の幽霊と怪物」は、もともとは1年前にやるはずだったのだということです。コロナの感染拡大で延期になったわけですが、森山さんがザハの役を演じることは1年前から決まっていた。森山さんに出演してもらおうとなった時に、「この人、ザハ・ハデイドのことを扱った舞台に出ますが、大丈夫でしょうか？」と誰も言わなかったのかと考えてしまいます。これは小林賢太郎さんや小山田圭吾さんをブッキングしたのと似ています。人選について、ちゃんと考えられていなくて、なんとなく有名な人や思いついた人を選んだら、こうなっちゃったのかなっていう気が僕はしています。森山さん自身は自分がザハの霊を演じるのは分かっているわけだから、森山未来ってすごい人だなと思いました。ある意味、確信犯だったのかもしれない。まあ、わかりませんが。だから僕が今回の開会式で一番心に残ったのは、森山未来の登場がはからずも示したアイロニーと、アイロニカルなだけではない、シリアスな問題提起ということになるかと思います。(聞き手・小峰健二)